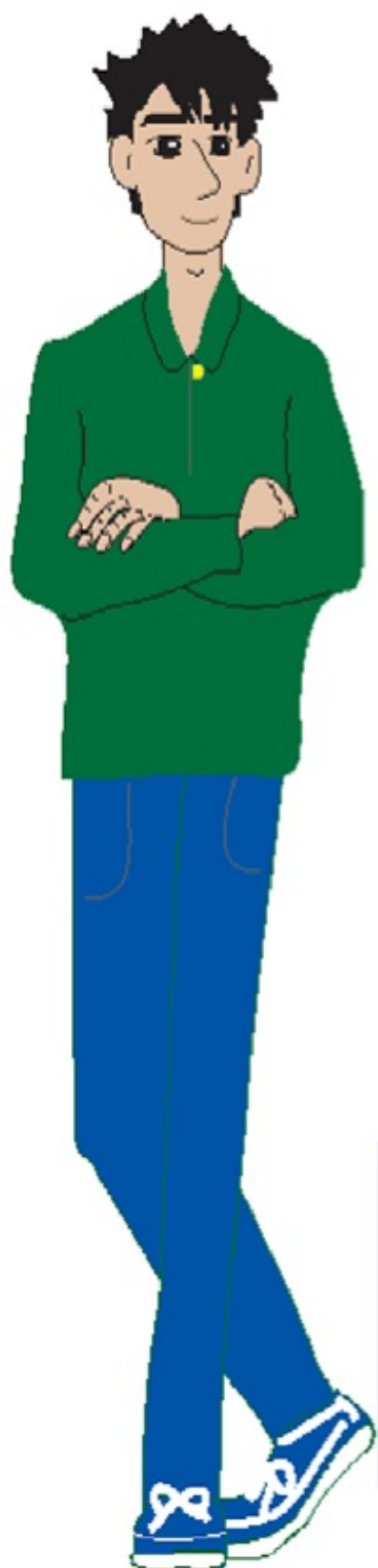


地縛記憶 1

序章

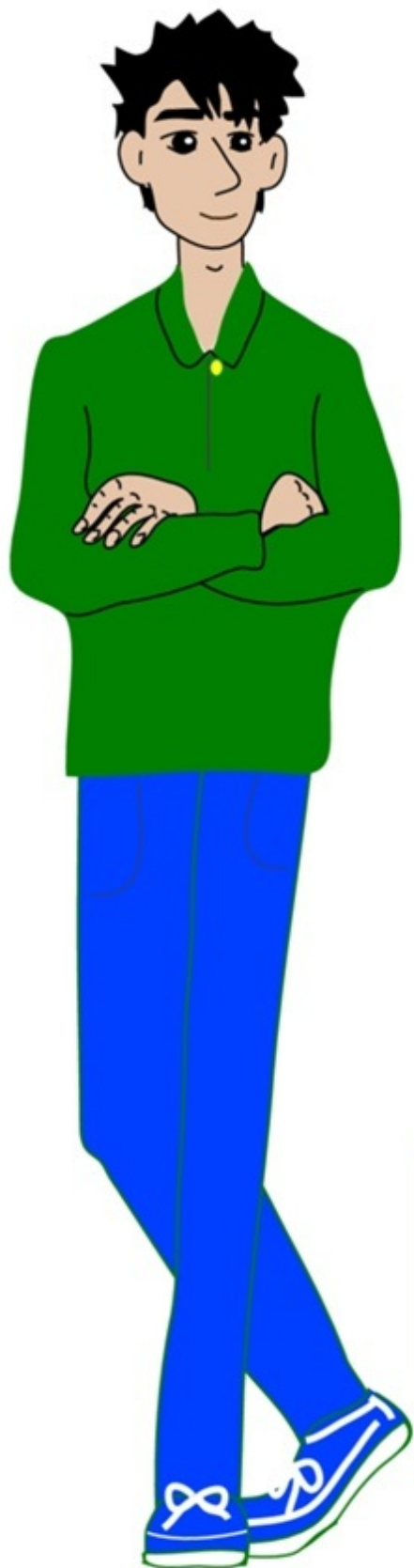


作 白鳥恭介

画 やみくまひろし

地縛記憶 1

序章



作 白鳥恭介

画 やみくまひろし

主な登場人物

安藤佑太

帝都大学医学部出身の神経内科医、三十三歳。剣道は四段の腕前。気ままに人生を生きるつもりでいたが、ある日、歴史上の血なまぐさい事件の起きた場所でその事件を目撃する。それ以来、殺人事件の起きた場所でその事件を映像として見ることができるようになり、その能力を武器にさまざまな事件に立ち向かうことになる。

安田杏子

安藤佑太の親友、坂田新太郎の従兄妹、二十六歳、安田財閥の令嬢。帝都大学医学部出身で、大学院生として医科学研究所で研究に取り組んでいる。幼い時に佑太と遊んだことがあったが、ある場所で佑太と再会をし、その後、彼の事件解決のパートナーとなっていく。

安藤慶太

佑太の一卵性双生児の兄。帝都大学法学部出身で、現在帝都地検の検事をしている。

坂田新太郎

帝都警視庁捜査一課殺人班の警部。佑太と慶太の幼馴染で親友。彼の母親は安田財閥の元令嬢で、杏子の叔母にあたる。

唐沢信吾

帝都高松署の巡査部長、二十七歳。高松記念公園で起きた連続殺人事件で坂田とともに事件を追うことになる。

《異変》

安藤佑太に異変が起きたのは、秋も半ばに入り、金木犀の花が強い香りを漂わせるようになってからのことだった。その日の午後、佑太は、囑託医をしている警視庁をあとにした。建物の前から桜田門の方角に眼をやり、ふと、昔そこで起きた事件を思い出していた。突然、目の前が真っ白になった。何事かと思っていると、そこに、不思議な映像が現れた。

目の前に、白いものが舞っている。雪だ。降りしきる雪は、道を白く覆っていたが、ところどころに石ころや土くれが顔を出している。視線を上げると雪の向こうに城門が霞んで見えた。左右には石垣と白壁が連なり、掘割の水面(みなも)にその姿を映していた。

〈何だ、これは！ 僕は別世界に入り込んだのか？ 幻覚、それとも、夢なのか？ 向こうに見える城門は、桜田外門？ いや、さっきまで見ていたのはどこか違っている。だが、お堀はある...この道路...舗装がない...雪の下は...土のようだ...車も走って来ない...〉

佑太は映像の中に入り込んだような感覚を覚えたが、寒さは感じなかった。

〈おおっ、この連中は、何者だ？ 番傘を差して、まるで時代劇の侍のようだ。刀を腰に差し、鬘もある。役者なのか？ いや、待て、違うぞ、これは本物の侍じゃないか！〉

侍は、身長百八十二センチの佑太から見ると皆かなり小柄だった。斜向かいにも雪に霞んで侍たちの姿がある。

左手から武家の行列が来るのが見えた。

〈大名行列か？...だとすると、ここにいるのは、見物の田舎侍。ええっ、僕はタイムスリップしたのか？ でも、どの時代だ？ 場所はどこだ？ 待てよ、僕の身体がない！ 身体が無いとすれば...タイムスリップしたのは、意識だけ？ そんな馬鹿な！〉

突然、眼の前に動きが起こった。行列の前にするすると一人の侍が近づいて行った。行列からは合羽姿の武士が一人出て来て、侍を制止しようとした。すると、突然、侍が刀を抜き放ち、武士を切り倒した。行列の前方は騒然となり、列に乱れが生じた。続いて銃声がした。それが合図だったのか、脇にいた田舎侍たちが一斉に行列に向かって駆け出した。佑太には眼もくれない。くれないどころか、佑太の中を突き抜けて行った。行列の武士たちは侍たちに立ち向かおうとしたが、刀の柄には袋がかけられていたため刀が抜けず、次々と切り倒されていった。中には慌てて逃げ出す武士もいた。侍たちは、守る者が減った駕籠へずんずんと近づいた。

駕籠周りで一人の武士が立ち塞がった。見ると、その武士は襷をかけ刀は抜き、闘う準備ができていた。その脇を一人の侍がすり抜け、駕籠に「エイ」と刀を突き入れた。駕籠の中から、「ウッ」と声がした。それを見た武士は、駕籠に刀を突き入れた侍に一太刀あびせた。「ウオッ」切られた侍はひと声あげて、その場に崩れ落ちた。見事な一撃だった。だが、その武士も侍たちに囲まれ多勢に無勢となり、手傷を負ってやがて倒れてしまった。

守る者もない駕籠に、集まった侍たちは次々に刀を突き入れていった。突き入れる度に中からうめき声が出た。一人の若侍が駕籠の扉を開け、中から虫の息となった武士を引きずりだした。若侍は「キエエイ」と甲高い掛け声を発し、刀を振り下ろした。それと交叉するように血しぶきが上がり、同時に、首が撥ねるようにして雪の上に転がった。〈わあ一何だ、これはテロか？

あっ、そうか、これは桜田門外の変だ！ あの首は、大老の井伊直弼。それが、何で今、僕の目の前に？ 何で、僕が、江戸時代の歴史的事件を目撃してるんだ？〉

そう思った途端、映像は消えた。

佑太の目の前に桜田外門と車が行き交う舗装道路が戻った。佑太は、我に帰った。

〈タイムスリップしたと思ったけど...やっぱり、幻覚だったのか...〉

その時、彼の頭を脈打つ痛みが襲った。

〈あっ、片頭痛だ！ じゃあ、今見た映像は、片頭痛のアウラかも〉

アウラとは前兆のことで、片頭痛のアウラとしては視野の欠損を伴う光のギザギザ、つまり閃輝暗点がよく知られている。佑太は映像を見たあとに頭痛が襲って来たので、映像を片頭痛のアウラと感じたのである。

〈だが、片頭痛で、あんなアウラは聞いたことがない！ としたら、映画で見た場面が、僕の頭の中に？ いや、あの映像は、映画とは違う。侍の顔も俳優の顔じゃない。無骨で、鬚も本物だ。身体も小柄だが引き締まっていた。僕たちの軟な身体とは違う。あれは、間違いなく本物の侍たちだった。いったい全体あれは...〉

しかし、幾ら考えても、納得できる答えは出てこなかった。

安藤佑太は三十三歳の独身、帝都大医学部を出た神経内科医である。週三日、非常勤の神経内科医として三つの病院で働いている。また、警視庁捜査一課で警部補を務める親友、坂田新太郎の紹介で、警視庁の嘱託医を兼務していた。三人兄妹で、帝都地検の検事をしている双子の兄の慶太と、二つ年下の妹のさやかがいる。そして、両親は共に健在である。不思議な体験をした数日後、佑太はひとり横浜の実家に帰った。玄関のチャイムを鳴らすとドアが開いて母親の美佐子が顔を出した。

「ただいま」

「お帰りなさい。あらっ、今日は、佑太だけなの？」

「そうだよ。慶太は、悠子さんと食事だって」

「あら、そうなの。婚約してても、週末にしか会えないのね、あの二人」

「そうだよ、僕だって、慶太とは一緒に暮らしていても、お互い忙しくて、顔を合わさない日もあるんだよ。ところで、父さんは？」

「今、散歩じゃないかしら」

「散歩って、神社の方？」

「そうだと思うわ」

「じゃあ、僕も行ってみるよ」

「あらっ、そう。じゃあ、行ってらっしゃい」

佑太はショルダーバッグを玄関の上がりかまちに置くと、先程歩いて来た庭の石畳を戻って、左右に傾斜のある細い道に出た。下ると先程電車を降りた新横浜駅に向かい、登ると小高い丘を経て神社に至る。

佑太は坂道を登り始めた。坂道の右手には民家が連なり、左手は落葉樹の林である。夏には青々と茂り空を塞いでいた木々の葉はすでに色づき、隙間からのぞく空の青さが鮮やかだった。坂道には、走る車も、すれ違う人の姿もなく、登る佑太の足は徐々に速さを増して行った。

丘の頂上に辿り着き南側を見下ろすと、斜面に建つ家々の間を埋めるように赤や黄色の木々が見える。視線を遠くにやると、超近代的な高層ビル群が眼に入った。急な坂を登って来たため、佑太は息切れを感じていたが、景色を見ているうちに呼吸が楽になった。少し冷たくなった風が頬を撫でて行く。

〈久しぶりだな、ここから港の景色を見るのは。今は、高層ビルがいくつも建っているが、昔は小さな漁村で...左手が生麦村。そうだ、たしか幕末に、あそこで事件が...〉

そう佑太が思った時、目の前がフラッシュでも焚かれたかのように真っ白になった。

〈まただ！〉

白い光の中に映像が流れ始めた。

旅装束の武士が刀を抜き払った。

「無礼者めが、なんばすっとか！ おい、待て一、キエエエ！」

武士が刀を一閃した。

「ギャーッ」

馬上で、異国の男が悲鳴を上げた。男の肩から胸、腹にかけて真っ赤な血が噴き出し、武士の顔は返り血を浴びて恐ろしい形相だ。周りの武士たちも抜刀している。

異国の男を乗せた馬は行列の横をよたよたと走り抜けようとした。すると、別な武士が声を発した。

「キエエエーッ」

刀は横に払われた。その瞬間、異国の男の身体は前のめりになった。馬はそのまま走り抜けようとした。が、異国の男は落馬した。腹から内臓が飛び出した男は地面に横たわり小さくうめいていた。一人の武士が近づき、男の首に「エイッ」と一太刀くれると男の身体は動きを止めた。武士はとどめを刺したのだった。武士はふり返ると傍に立つ頬の削げた精悍な顔立ちの武士に言った。

「一蔵どん、介錯は済み申した。殿様に報告せにゃならんな」

その声が終った途端、映像は消え失せた。

〈何だ、今のは！ この間とは違う映像だが、やはり、武士が出てきたな。いったい...〉
佑太は今見たばかりの映像を思い出していた。

〈武士が異国の男を切りつけた...武士は『キエエー』と叫んでいた。あれは、薩摩の薬丸示現流の使い手。すると、あれは...そうだ、イギリス人が生麦村で薩摩の行列と遭遇し、斬り殺された生麦事件！ さっき僕の頭に浮かんだ事件じゃないか。しかし、男にとどめをさした武士が、一蔵どんと呼びかけた相手は、何者？ あっ、一蔵は、薩摩の、大久保一蔵か。維新の三傑の一人、大久保利通。大久保は、あの場にいたんだ〉

映像が消えたあと、佑太は、再び脈打つ痛みに襲われた。が、薬を飲むと、まもなく治まった。

尾根伝いの小道を歩いて行くと、やがて神社の森が見えてきた。裏手から入ると、境内で身体を動かす父親の姿が見えた。父親の総一郎は、今は、ある財団法人の理事をしているが、警察庁長官まで務め上げた元警察官僚である。

総一郎は佑太に気づくと、体操を止めて右手を上げた。

「ここへはよく来るの？」

「ああ、そうだよ。ここに来ると、気分が爽快になる。佑太もお参りして来いよ、神社に来たときは」

「はい」

佑太は財布から百円玉を一枚取り出すと、神社の本殿の前の賽銭箱に投げ入れた。二礼、二拍手、一礼と、手順通りに参拝を終えると、総一郎のそばに戻った。

「何か、頼みごと、したのか？」

「いや、僕は、神様に願いごとなんか、したことないよ。宮本武蔵が、独行道に書いてるだろう。『仏神は尊し、仏神を頼まず』ってさ」

「ほう、佑太は武蔵の信奉者だったのか」

「高校時代に、吉川栄治の『宮本武蔵』、三度も読んだからね。かなり、影響を受けてると思うよ」

「そうか、求道者、武蔵の影響を受けるのはいいことだ。佑太もしっかり精進しろよ、医術の道で」

「そのつもりだよ、僕のやり方でね」

「じゃあ、そろそろ、戻るけど、どうする？」

「ああ、僕も一緒に戻るよ。お腹、空いてきたからね」

「求道者も、腹が空いたら、家に帰るか...健康的でいいじゃないか、ハッハハハ」

二人は、神社の玉砂利を踏み鳴らし、先程入って来た神社の裏手へと歩いて行った。頭上では、日差しが境内に茂るかえでを照らし、緑、黄、赤の色のグラデーションが際立っていた。

翌朝、佑太が階下に降りて行くと、リビングルームのテレビにニュースが流れていた。

「コンビニ強盗、最近、続くわね。また、五人組って言ってるけど、同じ犯人グループかしら？

防犯カメラに、犯人、写ってるらしいけど、眼出し帽被ってて、人相が特定できないのね」

「おはようございます」

佑太は、両親に声をかけた。

「あらっ、もう起きたの？ 今日、珍しく早起きなこと」

美佐子はテレビから視線を外すと、佑太を見て笑った。

「昨日は疲れてたから、熟睡しちゃったよ。で、またコンビニ強盗なの？」

「そうなのよ。物騒な世の中になったわね。こんなに犯人が捕まらないんじゃ、安心して買い物にも行けないわ」

「警察も手を焼いているんだよ。最近、東京の犯罪は国際化しちゃってさ、外国人がからんだ犯罪もあって、捜査もやりにくいんじゃないかな。手口も大胆なのがあるしね」

「いっそ、超能力か何かで犯人見つけて、スパッと解決できる人、出て来ないのかしら」

「そんな、超能力なんて... 超能力？ えっ、まさか...」

「あら、どうかしたの？超能力のある人が誰かいるの？」

「いや、そんなスーパーマンみたいな人、いるわけじゃない」

「そうよね、まさかね。それに、そんな人がいたら、警察なんて必要なくなるものね、父さんには悪いけど」

美佐子は総一郎を見ながら言った。すると、それまで黙って考え込んでいた総一郎が口を開いた。

「そうだな、警察の捜査能力そのものが、最近は、落ちているのかもしれないな。昔は職人気質の人が多くて、地獄の果てまでも、とことん追いかけて、犯人を捕まえる。そんな気概も気骨もある刑事がいたんだが、今は、警官も皆、サラリーマン化してしまってるからな。母さんみたいに、超能力に期待してしまうのも、分かるような気がするよ」

総一郎は自嘲気味に言った。

佑太は父親の言葉を聞きながら、自分の見た映像のことを思い出していた。

〈あんな昔の光景、僕に見えるなんて！ もしかして、僕に、超能力が芽生えたのか？ 僕に、過去の出来事を見る能力が。でも、いったい、何故？ 〉

考えれば考えるほど、佑太の頭の中で謎は深まっていった。

《医科学研究所》

翌週、いつもより早起きをした佑太は、帝都大医科学研究所の宮田准教授の部屋を訪れていた。その日は勤務がなかったのだ。宮田は大学の先輩で、剣道部の先輩でもあった。四十になったばかりの、二人の子供がいる所帯持ちである。気さくな性格で、佑太は学生の頃から何か相談事があると彼のもとを訪れていた。宮田は『記憶』を主な研究テーマとしており、その道ではかなりの業績を上げていた。その日、コーヒー党の宮田にしては珍しく、熱い紅茶の入ったカップを佑太の前に置いた。

「イングリッシュブレックファーストだよ。たまには紅茶もいいだろう」

「ええ、そうですね。うん、イングリッシュ、ブレックファーストか、なかなかいい香りですね」

佑太は紅茶をひと口飲むと言った。

「ところで、今日は、何の用だい？」

「実は、先生の御意見を伺おうと思って」

「僕の意見？ で、何についての意見かな？」

「あのう、最近、変な映像を見るようになったんですよ、僕」

「変な映像？ 変なって、どんな？」

宮田は興味深そうに訊ねた。

「見たこともない昔の映像ですよ。最初は、桜田門外の変でした。あの凄惨な殺戮の光景が目の前に飛び込んできたんです。それも、鮮やかな映像で、僕が、まさに、その場にいるって感じで、臨場感があるんです。ただ、僕の身体は、自分にも見えないし、そこにいた侍たちにも見えてなかったようなんですが」

「見えなかったってことは、意識だけってことだな」

「そうです。前後、左右、上下に空間は広がっているのに、身体はないので、意識だけだと思います」

「それは不思議な話だ。で、その映像、どこにいる時に見たんだ？」

「囑託医の仕事で警視庁に行って、終わって警視庁の建物から出ると、目の前に桜田外門が見えて...いつものように。それで、その時、ああ、ここは幕末に大変な事件があった場所だなあと、思ったんです。そしたら、突然、目の前に、その事件の場面が...」

「それが、桜田門外の変だとすると、井伊直弼の首を、薩摩藩を脱藩した有村次左衛門っていう侍が撥ねたところも、目撃したの？」

「そうなんです。その有村次左衛門と思われる侍が、駕籠から、虫の息になった井伊大老を引きずり出して、その首めがけて刀を振り下ろしたんです、凄い形相をして。一振りですぐ首は落ちました。そして、首は、雪の上に、血しぶきをあげて、ドン、トンと転がりましたよ。凄かったです、さすがに。僕もあんなの初めてですから、目の前で見せられて、腰が抜けそうでしたよ」

「うーん、それは凄い。有村次左衛門は薩摩示現流だから、『チェストー』って奇声を発してたんだらう？」

「いえ、『キエエー』という叫び声をあげて、ズンと、首に目がけて太刀を振りおろしました」

「『キエエー』ね。猿叫(えんきょう)か...それが本当だらうね。で、首を撥ねたあとは、その有村次左衛門は、どうしたの？」

「いや、それが、映像は首を撥ねたところで消えてしまいました」

「うーん、そうか。で、他にも、何か見たの？」

「次に見たのは、実家の横浜に帰って、丘の上からみなとみらいを眺めていた時のことです。あの近くに、昔、生麦村があったんだな、そこであの生麦事件が起きたんだ、と思った途端、またしても、映像が現れたんですよ。今度は、その生麦事件の映像でした。異国の男が切られ、腹から内臓が飛び出し、最後にとどめを刺される場面が鮮やかに見えました。そして、大久保一蔵の姿も見えました。実に生々しい映像でした」

「まさに、英国人殺傷事件だね、それは。他には、何か？」

「映像を見たのはその二回だけです、今のところは。ああ、それから、その映像が終ってしばらくして、片頭痛発作が起きました。それは僕の持病なんですけど」

「片頭痛発作の前に見える、閃輝暗点とは、まるで違うね」

「そうです。あんな前駆症状は、片頭痛の患者さんからも聞いたことないですから」

「他に、可能性としては、てんかんだけど、これもね、見たこともない過去の出来事の光景が見えるってのは、考えにくいね」

「念のため、行ってる病院で、脳波もMRIも撮って検査してみたんですけど、いずれも異常なしでした」

「そうだろうな」

「宮田先生、僕がタイムスリップしたって可能性はないでしょうか？」

「タイムスリップしたとすれば、身体が見えないのはおかしいよ」

「そうですよね」

宮田は、あごを右手で掴むと、人差し指をときどき動かしながら、視線を中空に送っていた。その仕草は、宮田が真剣に考えをめぐらす時の癖だった。佑太は、紅茶を飲みながら、缶に入ったクッキーを摘み、宮田の思索が終るのを待った。二人のいる部屋には沈黙の時間が流れて行った。

沈黙を破ったのは部屋に入って来た人物だった。

「宮田先生、データ、見ていただけましたか？」

女の声だった。佑太は声の主を見た。部屋の入口に白衣を着た若い女が立っている。二十代半ばと思えるショートカットの綺麗な女である。化粧はないが端正な顔立ちで、白衣姿も手伝ってか、知的な雰囲気漂わせていた。

「ああ、安田君か。さっき見終わったよ。いいデータが出てるじゃないか。短期的には効果があることは今回の実験で確かめられると思う。このまま、進めていいんじゃないの。それが、僕からのコメントだよ。データを見終わって、すぐに君を呼ぼうと思ったんだけど、来客があったんでね。後回しになって済まない。来客といっても大学の剣道部の後輩なんだけど...そうだ、紹介しよう、安藤佑太君だ。君には大学の先輩に当たるけどな」

「安藤です、よろしく」

佑太は会釈をした。

「安藤、こちらは安田杏子(きょうこ)さん。お前の大学の後輩だ。彼女は大学院生だけど、今の研究室で仕事をしてるんだよ」

「杏子です。お久しぶりです、佑太さん」

杏子の予期せぬ言葉に、宮田と佑太は思わず顔を見合わせた。

「佑太さんって、安藤、お前、安田君と知り合いなのか？」

「知り合い？ 安田...杏子...あっ、坂田の従妹の杏子ちゃんか！」

「ピンポン！ 思い出してくれましたね、大事な婚約者のことを。もう、私のこと、忘れてしまったのかと思いましたよ、佑太さん」

「婚約者？ 佑太、お前、安田君と婚約してたのか？ 隅に置けない奴だな」

「はい、そうなんです。小さい頃のことですが、確かに、佑太さんが私に、結婚してくれるって、約束してくれたんですよ。佑太さん、覚えてるでしょう」

「ええっと、そういえば...そんなこと...あったような、気がします。確か、中学生の頃だったと思いますが...」

佑太は、小学校高学年から中学生の頃まで、双子の兄である慶太や親友の坂田新太郎と探偵ごっこをやっていた。リーダーは坂田であったが、謎解きは佑太が群を抜いていた。佑太が中学二年生の時、小学生の杏子が、従兄の坂田に連れられて、頻繁に顔を出すようになった。

杏子は、何故か、グループの中で佑太を気に入り、遊び相手をさせることが多かったのである。ある時、大きくなったら結婚してねと杏子に迫られて、冗談半分で結婚の約束をしたことを佑太は思い出していた。

「じゃあ、やっぱり、お前たち、婚約者同志ってことだな。アッハッハハ」

宮田はようやく事情が飲み込めたようだった。

「いやあ、まだ、お互い、中学生と小学生の頃の約束ですから」

「ええっ、私は今でも、信じてますよ、あの約束」

杏子はコケティッシュな笑みを浮かべた。

「おい、安藤、お前、責任重大だな。でも、こんな美人のお嬢さんで良かったじゃないか、早めに予約してて、アッハッハハ。でも、世の中って、狭いもんだね。じゃあ、安田君、君もそこに、座って座って。紅茶、今、いれてあげるから」 宮田はそう言って、腰をあげた。杏子は佑太の隣に座り、彼の顔を見て笑った。佑太は、顔が火照るのを感じた。〈あの小さかった女の子が、こんな綺麗な女性に...〉

佑太は、冷めた紅茶をごくりと飲んだ。

「はい、どうぞ」

宮田は、杏子の前に紅茶をいれたカップを置くと、再び二人の前に座った。

「ところで、宮田先生、さっきの話ですけど、何か思いつかれたことはありますか？」

佑太は、話を戻した。

「あっ、そうだったな、お前の相談を受けていたんだ。でも、安田君に聞かせてもいいのかい？」

「ええ、構いませんよ、僕は」

「えっ、何か、私が聞いてはいけない内密の相談があったんですか？ 佑太さんから」

「ああ、不思議な映像の相談だよ、それは」

宮田は答えた。

「ええーっ、不思議な映像の話ですか。それなら、ぜひ聞かせてください。いいですよ、佑太さん」

「えっ、ああ、いいけど。じゃあ、説明するね、僕の不思議な体験を」

佑太はそう言うと、自分の見た映像を話していった。

「かっこいいですね！」

佑太の話に区切りがつくと、杏子が叫ぶように言った。

「えっ、何が、かっこいいんだよ。僕は、その映像を見て、頭がどうか、なったんじゃないかと思ってね、宮田先生に相談に来たんだよ」

「あらっ、それは、どうかなってるに、決まってるでしょう」

「えらく、はっきり言うんだね、杏子ちゃんは」

「ええ、だって、佑太さんの頭に何か変化があったから、超能力が目覚めたんでしょう。超能力があるなんて、かっこいいじゃないですか、佑太さん」

杏子は眼を輝かせていた。

「安藤、お前が見た映像というのは、ある場所に刻まれた記憶ってことじゃないかな」

二人の会話を黙って聞いていた宮田が言った。

「ある場所に、刻まれた、記憶、ですか？」

佑太は訊いた。

「そうだ」

「それって、地縛霊とか言われるものと、同じようなものですか？」

今度は杏子が訊いた。

「地縛霊？ それとは、ちょっと違うんだ。僕の言うのは、何か血なまぐさい事件が起きた時、その場に居合わせた人たちだけでなく、その時代を共に生きた人たちの記憶にまで刻まれ、それらが大きな想念となって事件現場に刻まれる、それを、ある特殊な感性を持った人間が時を越えて見透すことがある、僕はそういうことがあるんじゃないかと、以前から思っていたんだよ」

「宮田先生は、そんな考えを持っておられたんですか？」

佑太は訊いた。

「いや、これは今までは、推論にしかすぎなかったんだ。だが、お前の話を聞いてて、これが、そうなんじゃないかと、僕は直感したんだが」

「じゃあ、それ、『地縛記憶』って命名しちゃいましょうか」

「地縛記憶？ いい響きだね。よし、それで行こう。地縛記憶だ、そうだ、そうだ」

宮田は何度か頷いた。

「安藤、もしかしたら、これは凶悪犯罪の捜査に使えるかもしれないぞ。世間を騒がし皆の記憶に残るような血なまぐさい事件ほど、しっかりと地縛される可能性は高いと思うからな」

「凶悪犯罪の捜査ですか？」

「そうだ。お前の超能力を使ってな」

「凄い、凄すぎます、佑太さん、きっと、名探偵になれますよ」

「名探偵、なんて言われても...僕は」

「いや、そうなれば名探偵だろうなあ、安藤は。ただし、この能力のこと、あまり他人には言わない方がいいかもな。犯罪者にとっては、脅威だからね。安田君も、頼んだよ」

「分かりました。私、断じて漏らしません、私と佑太さんだけの秘密にしておきます」

「えっ、僕もいるんだけど」

「あっ、そうでしたね。でも、宮田先生は、当然、秘密を守ってくださるでしょうから」

「それは、もちろん。安田君と僕と、あとは、双子の慶太君まで、かな、秘密を打ち明けるとすれば」

佑太は、二人の話を聞きながら、今後、自分がどう身を処すべきかを考えていた。

《コンビニ強盗殺人事件》

佑太が杏子と再会してから数日後、六本木のコンビニで新たな強盗事件が発生した。コンビニを狙った強盗事件は、それまで立て続けに起きていたが、今回は死者まで出た。殺されたのは店長と客の一人だった。

犯人グループはまたしても捕まらず、死人が二人も出たということで、マスコミで取り上げられることが多くなり、警察の捜査に不手際があるのではと非難する報道も増えていた。巷では、一連のコンビニ強盗事件には外国人犯罪組織が関与しているのではとか、背後に暴力団組織の存在があるなどと、噂されていた。

その日、佑太は、六本木交差点の一角でぼんやりと通り過ぎる車と人の流れを眺めていた。

「お待たせ、佑太さん。でも、時間きっかりですから、私、遅刻はしてませんよ、はい」

突然、耳元で杏子の声がして佑太は我に帰った。

「あっ、杏子ちゃん、来てくれて有難う。わざわざ呼び出して、済まなかったね」

「あらっ、遠慮しないでください。私と佑太さんの仲じゃないですか。呼び出していただいて、嬉しいです、私」

杏子は無邪気に言った。

佑太は、六本木のコンビニ殺人事件の現場で自分の能力の真偽を確かめるため、その立会人として杏子を呼び出したのだった。

「じゃあ、行くよ」

「はい、行きましょう」

二人は外苑東通を百メートル程歩くと、路地に入った。

「あそこかな、黄色いテープが張ってあるし、警官もいる、おっ、カメラマンも。マスコミ関係者もいるのかな？ 何だか、物々しいな」

近づくると、若い女性レポーターがマイクを警官に突き付け質問をぶつけていた。見ると、警官の顔は困惑気味だった。

「捜査の進捗状況はどうなっているのでしょうか？」

「本官からは、答えられません」

警官の答えにレポーターはすぐに反応した。

「じゃあ、どなたに聞けば、捜査状況は分かるのでしょうか？ 犯人は今度こそ、逮捕できるのでしょうか？」

レポーターは再びマイクを向けたが、警官は無言だった。すると、レポーターはカメラに向かって決め付けたように言った。

「このように、世間を騒がしている一連のコンビニ強盗事件の捜査は、未だ進展を見せていないようです。以上、現場からの報告を終わります」

周りを見回すと、数社の取材クルーが張り込んでいた。杏子が耳元で囁いた。

「佑太さん、ここでいいんですか、中に入れて貰わなくても」

「そうだね。中に入った方がいいとは思うけど、ここは麻布警察署の管轄だな。所轄の警官だと、知り合いはいないからね。部外者は入れてくれないだろう」

佑太はそう言いながら、黄色いテープ越しにコンビニの方を見た。すると、店から一人の体格の良い男が出てきた。顔を見ると坂田だった。坂田は本庁勤務だったが、事件が重大化したために派遣されたのだ。

「おーい、坂田、僕、僕だよ！」

佑太は思わず大声を出した。坂田はすぐに気づいたようで走り寄って来た。

「どうしたんだ？ 佑太。あっ、杏子、お前まで、何でここにいるんだ？ それも佑太と一緒に」

「何でって、私は、今日は、佑太さんに頼まれて、ここに来たんです」

「頼まれて来た？ お前たち、おれに内緒で、付き合ってたのか？」

「内緒はないでしょう。ほらっ、小学生の時、私が佑太さんと、結婚の約束をしたこと、覚えてないの？」

「ええっ、お前なあ、あれは、ガキの頃の約束だろう！ 佑太は、お前をからかって、約束したんだよ」

「そんなことないです。佑太さんは新兄さんと違って、からかったりしません」

「おい、佑太。杏子、こんなこと言ってるけど、お前、大丈夫か？ 責任取れるのか？」

坂田は佑太が杏子の言葉を遮ろうとしないので、怪訝な顔をして訊いた。

「まあ、流れに任せるのが、僕の生き方だから」

「何だ、それ、答えになってないぞ！」

「まあまあ、新兄さん、今日はその話は横に置いて、実は頼みがあるの」

「何だ、頼みって？」

「あのう、私たちを、中に入れてくれないかしら？」

「お前たちをか？ いくら身内でも、部外者をわけもなく、入れるわけにはいかないぞ」

「今は部外者だけどさ、僕、プロファイリングできるからさ、お前の捜査に協力できると思うんだ、きっと。だから、入れてくれよ」

佑太は言った。

プロファイリングとは犯罪捜査で、起きた犯罪の特徴を行動科学的に分析して、犯人の特徴を推論することである。また、それを行う専門家をプロファイラーと呼ぶ。佑太は、超能力を隠すため、プロファイラーを名乗ることにしたのだった。

「プロファイリング？ 佑太、お前、いつ、そんなもの、マスターしたんだ。初耳だぞ、おれは」

「いや、前から、少しずつ勉強してたんだ、こっそりとね」

「私は、前から知ってたわ。だから、私が保証人になります、佑太さんがプロファイリングできるってことの」

「そうか。まあ、二人してそうまで言うのなら。それに佑太は警視庁の嘱託医だしな。まあ、一度試してみるか。どうせ、今は、こっちも手詰まり状態だからな。じゃあ、こっちに入って」

坂田は黄色いテープをたくしあげて、二人を中に入れた。

その時、先程の女性レポーターが走り寄り、マイクを坂田に向けた。

「本庁の方ですね。捜査の状況を教えていただけませんか？ ちょっとでいいですから、お願いします」

「今は、まだお話できません。いずれ、区切りが付いたところで、責任者から発表しますから」
坂田は迷惑そうに言った。

「じゃあ、そのお二人は、どういう方ですか？ 事件の関係者ですか？ 警視庁の関係者ですか？ 先程、プロファイリングとか言っておられるのが聞こえましたが、プロファイラーの方ですか？ 捜査が難航しているので、いよいよ、プロファイリングを頼まれたのですか？」

女性レポーターは執拗に迫ったが、坂田は無視してコンビニの方へ歩き出したので、佑太と杏子はあとを追った。残された女性レポーターは悔しげな顔だったが、思い直すとカメラマンを呼びつけ、三人の後ろ姿を撮影させていた。

コンビニ店内を見廻すと、レジのあるカウンターの手前と奥に死体の輪郭線が描かれていた。
〈あそこが、被害者の最後の場所か〉

佑太は、ひと通り店内を見て回ると、レジの前に戻り、座り込むと輪郭線を凝視した。

〈さあ、来い、見えて来い！ 地縛記憶！〉

佑太は待った。すると、目の前が白くなり、まもなく映像が現れて来た。

そこは輪郭線もない事件の前のコンビニの中だった。店内には数人の客がいた。一人の客が品物を入れたかごをレジの台に置くと、レジの向こうの店員がにこやかに対応した。その時だった。

入り口のドアが突然大きく開かれ、眼出し帽を被り皮の手袋をした五人組が入って来た。五人は、それぞれ、銃かバットを手にしていた。五人がレジに近づくと、レジの前にいた客の男性は動きを止めて五人の動きを見守った。五人のうちの三人が銃を持ち三方に向けて客と店員を威嚇した。

黒い眼出し帽の一人が、店員にレジの金を出すよう迫った。

「おい、これに入れろ」

声は男のものだった。店員は恐怖のためか、ぎこちない手つきでレジの金を集めると、眼出し帽の男が出したリュックに入れた。リュックの色はグレーで、鳥のロゴマークが見えた。

「これで、全部か？ もっとないのか」

眼出し帽の男は、銃で威嚇して店員に迫った。

「これで、全部です」

「ざけんな！ もっとあるだろう」

男が銃を近づけると、店員の顔に恐怖に加え困惑の色が浮かんだ。その時、突然、レジの前にいた客が、眼出し帽の男に掴みかかり、その手首を掴んだ。それを見た店員が銃を掴んで、もぎ取ろうとした。それを見た賊の一人が、バットで客の頭を後から殴った。鈍い音がした。客は頭を押さえながら、その場に崩れるように倒れていった。

「このやろう、面倒かけやがって」

これも男の声だった。バットを持つ男の手首にサソリの刺青が見えた。

客が倒れると同時に、銃から弾が発射されていた。弾は店員の胸に当たり、呻きながら店員の身体はカウンターの向こうに倒れた。店内には客たちの悲鳴と怯えた恐怖の音があがっていた。

「クソ、痛えな」

黒い眼出し帽の男は倒れた客に爪を立てられ、手首に怪我をしていた。

「急ぐぞ！」

怪我を負った男はそう言うと、金を入れたリュックを肩にかけ、仲間の四人を引き連れて店のドアから走り出ていった。

佑太はドアの向こうに視線を送った。すると身体がドアから抜け出たようにコンビニの外が見えた。五人組はグレーのワゴンに乗り込んでいた。

〈これは、トヨタのエスティマだ〉

五人組が乗り込むとワゴンは走り出したが、駐車場の出口でフェンスにぶつかった。その時、窓越しに眼出し帽を脱いだ女が嫌な顔をするのが見えた。しかし、車は止まらず、そのまま走り去って行った。映像はそこで途絶えた。

我に返った時、佑太は死体の輪郭線の前にしゃがみ込んでいた。映像を見る前と同じ姿勢のままだった。傍には杏子いて、心配げに彼の顔を覗き込んでいた。坂田は立ったまま、成り行きを見守っている。

「どうでした？ 何か分かりましたか？」

杏子が訊いた。

「ああ、かなりの情報を掴んだよ」

佑太は満足げに答えたが、すぐに頭痛が襲うのを覚悟した。だが、頭痛は襲って来なかった。

「かなりの情報って、何か分かったのか？ 佑太」

今度は坂田が訊いた。佑太は右手の親指を立てて頷くと、立ち上がった。

「犯人は五人組だ」

「ああ、それはこっちも把握しているよ。客の証言はあったし、防犯カメラも捕らえていたからね」

「それから、店員、いや、あれは、店長だ。店長は左胸を銃で撃たれ、客の男性は、後頭部をバットで殴られてここに倒れ込んだ。店長はカウンターの向こうだ」

「それも、把握済み」

坂田は、佑太の話に新たな情報がないので、不満げに言った。

「そして、銃を撃った男の右手首に、爪を立てられた傷がある。被害者の爪に皮膚片が付いてたはずだから、これは、そっちも把握してると思う。その傷は三本の指の爪で付けられているから、三つの細い帯状の傷になってるはずだ。それと、バットで殴った男の右の手首にはサソリの刺青がある。それと、金を入れて持ち去ったリュックは、ペンギンのような鳥のロゴが付いていて、生地はグレーのスエード。あれは、大学生に人気のブランドだよ。それと、使った車はグレーのワゴン、トヨタのエスティマだ。ナンバープレートは剥がされていた。出る時フェンスにぶつけて擦りつけたから、車の左側前方にそのキズがあるはずだ」

「ええっ、そんなことまで、分かるのか、プロファイラーって。銃を撃った男の手首に三本の帯状の爪あと、もう一人の男の右手首にサソリの刺青、リュックのロゴマークと生地、車のキズの箇所、うん、それだけ分かれば...」

坂田は満足げな顔になった。

「ああ、坂田。おまけがある。賊の一人は女で、顔が見えた」

「ええっ、どうしてそこまで？ プロファイリングって、そこまで分かるのか！」

「分かるのさ、レベルの高いプロファイラーだとな。モンタージュ手配写真もつくれるぞ」

佑太はからかうように言った。

《謎のプロファイラー》

紅葉の季節が終ると、木枯らしが吹きすさび、街を歩く人の背中が少し丸く見えるようになっていた。横浜の佑太の実家の庭には山茶花（さざんか）が咲き誇り、椿も蕾を膨らませていた。その日佑太は、双子の兄の慶太と二人で実家に戻っていた。

空調の効いたリビングルームでは親子四人の会話が弾んでいた。

「あの一連のコンビニ強盗事件の犯人グループ、とうとう捕まったそうね。よかったわね。貴方たちのお友達の坂田君のお手柄だったんでしょう。凄腕の刑事になってたのね、坂田君」

母親の美佐子が慶太に言った。

「ああ、犯人グループは、もう、地検に送られて来てるよ。だから、今は、うちの仕事が大変なんだよ、起訴に向けてさ。でも一時はどうなることかと思ったよ、最後はあっけなかったけど。やっぱり、殺人までしてかして、墓穴掘っちゃったんだね。あれで、本庁も、本腰入れて捜査に入ったんだからね」

慶太は言った。犯人グループの取り調べは慶太の担当ではなかったが、坂田と地検の担当検事からの情報で、おおかたの事情は把握していたのである。

「その犯人グループっていうのが、ネットで知り合った大学生たちだって、いうじゃないか、男四人に女一人の。最近の大学生のやることは、全く。僕らの世代では、到底、考えられないことだね。僕らの世代が徒党を組んでやっていたのは、学生運動だからね。あれは確かに反体制かもしれないけど、一部を除けば、反社会的なものじゃなかったんだよな。ネット社会の悪い面が出てくるのかな、これも」

父親の総一郎が事件の背景を嘆いて言った。

「で、その犯人グループの割り出しに、大きな役割を果たしたヒーローがいるんだよ」

慶太が佑太を横目で見ながら、総一郎に言った。佑太はどこか落ち着かない様子で新聞を広げていた。

「ヒーロー？ そんなヒーローが事件の解決にからんでいたのか。それは、どんなヒーローなんだ。まさか、スーパーマンじゃないだろうな」

「いやいや、スーパーな能力を持つスーパーヒーローではあっても、スーパーマンとは違うね」

「で、何をやってくれたんだ？ そのヒーローは」

「それがね、そのヒーローっていうのは、プロファイリングを駆使して事件の解決に貢献したんだよ。つまり、プロファイラーさ、それもレベルの高いね。だから、スーパープロファイラーって言った方が、分かりやすいかな」

「プロファイラー？ 何よ、それ」

美佐子が訊いた。

「簡単に言うと、プロファイラーっていうのは、犯罪が起きた時、その犯罪の特徴を調べてね、犯人像をあぶり出す仕事をやる専門家なんだよ」

「へえー、よく分からないけど、知的なお仕事みたいね。頭のいい人じゃないと出来ない仕事じゃないの」

「もちろん、頭のいい奴じゃないと、出来ない仕事だよ」

慶太は再び佑太に眼をやった。

「具体的には、どんなことを示唆してくれたんだ？ そのスーパープロファイラーって人は」
今度は総一郎が訊いた。

「犯人が現場で怪我して傷を負ったこと、傷の箇所と形、もう一人の犯人の右手首にサソリの刺青があったこと、持ってきたリュックのロゴと生地、犯人グループが乗って来た車の色と車種、ぶつけた車の部位、犯人の一人だった女の顔、こんなところかな、プロファイラーが教えてくれたことは」

「ほほう、そんなことまでプロファイラーって、分かるのかい？」

総一郎は感心したように言った。

「いや、普通のプロファイラーにはそんな芸当はできない。そこがスーパープロファイラーと呼ぶ所以だよ。僕も聞いて驚いたんだ、そんな凄腕のスーパープロファイラーがいるなんて」

慶太は、今度は笑いを浮かべて言った。

「ああ、それから、佑太、最近、ステディで素敵な彼女ができたらしいよ。今度の娘(こ)は僕からもお薦めだよ、佑太の嫁さんとして。おい、佑太、お前、親にはちゃんと紹介しろよ」

「えっ、そうだね、いい娘だよ。坂田の従妹で、安田杏子さん。歳は、僕の七つ年下だから、二十六だね。僕と同じ帝都大医学部卒で、今は大学院生で医科研で研究やってるよ」

佑太は新聞を畳むと、杏子のことを話した。

「それに、美人で気立てもいいしね。母さんたちも、きっと、気に入ると思うよ」

慶太が付け加えて言った。

「そう、そうなの、そんないい方なら、早く連れてらっしゃい。母さんも会ってみたいわ、その杏子さんって方に」

美佐子は嬉しそうに言った。彼女は、慶太は地検の検事として堅実に働き、婚約者もいるのに、双子の弟の佑太が、医者にはなったものの、気儘に非常勤の勤務医を続けていて結婚相手も決まらず、心配になっていたのである。父親の総一郎は、散歩の途中で買ってきた週刊誌を読み始めていたが、突然、三人の会話を遮るような声を出した。

「おい、この記事をみるよ。謎のプロファイラーの出現で、捜査に困難を極めた連続コンビニ強盗殺人事件、急転直下の解決、なんて書いてあるけど...ここに写ってるの、佑太じゃないのか？」

「えっ、どこ、どこに佑太が写っているんです？」

美佐子は慌てて眼鏡をかけると、夫の開いた週刊誌を見た。

両開きのページには写真が三コマ載っていた。一コマ目には、たくしあげたテープの下をくぐる男女二人の後ろ姿が写っており、二コマ目には、コンビニのドアを入る二人の横顔、三コマ目には、店内で辺りを見回す二人と何人かの警察官が写っていた。男女二人の横顔とコンビニ店内の正面の顔には黒塗りで目隠しがされていたが、母親の美佐子には、写っている二人のうちの一人在佑太であることはすぐに分かった。

「あらっ、ほんと、これ貴方じゃないの！ 佑太、そうでしょ、貴方に間違いはないわ。でも、何で、こんな写真が、ここに載ってるの？」

「えっ、ちょっと見せて。あー、そう、そうだね、僕だね、これ」

佑太は観念したように言った。

「...ということは、貴方が謎のプロファイラーなの？」

美佐子はさらに佑太に迫った。

「あっ、それはどうかな。確かに、坂田に頼まれて、ちょっとアドバイスをさ、だって、僕、警視庁の嘱託医だからね」佑太は、今度は、あいまいな返事をした。

「ってことは、貴方が、やっぱりプロファイラーじゃないの、この記事からすると」

「まっ、そういうことになるかな、うん」

佑太はしぶしぶと認めた。

「でも、佑太、お前はいつから、そんなプロファイラーなんて仕事ができるようになってたんだ。僕は、全く気づかなかったが...美佐子もだろう？」

「ええ、そうですよ。私もそんなこと、気づくわけないでしょう。ところで、この貴方の横に写っている女性、この方は？ もしかして、杏子さん？」

「えっ、ええ、そうなるかな、その写真からすると」

「佑太、貴方、何を寝ぼけたようなこと言ってるんです、ほんとに。でも、眼のあたりは隠れて見えないけど、スタイルもいいし、綺麗で上品そうな方ね、杏子さんて。早くお会いしたいわ、ねえ、貴方」

「ああ、そうだね。僕も見たいね、佑太の嫁さんになる女性なら」

総一郎は、妻に合わせるように言った。

「いや、まだ、嫁さんなんて...」

「何言ってんだよ、この間会った時、坂田の奴が、言ってたぞ。杏子は、佑太の嫁さんになるつもりでいるし、佑太も承知のようだから、よろしく頼むってさ。僕、この耳で聞いたんだぞ、おい、佑太」

「まっ、そういうことになるんだろうな」

「何だい、他人ごとみたいな言い方して、いい加減だな、お前って奴は。でも、杏子さんって、そのお前を制御可能な、しっかりした娘らしいから、お前にはぴったりかもな、ハッハハ」

「あらっ、そうなの。佑太のお嫁さんは、しっかりした方じゃないと、務まらないって思っていたから...これで私も大安心よ、よかった」

最後は、美佐子が決めつけたように言った。

《資産家殺人事件》

横浜の実家から品川のマンションに戻ると、佑太は、事件現場で見た映像を詳細に記録しパソコンに保存し、そのコピーを杏子にメールで送った。リビングに戻ると、慶太が帰っていて佑太の顔を見るなり言った。

「佑太、今度は僕の事件に、協力してくれないか」

「ああ、いいけど、僕にできることなら。で、事件って、どんな事件？」

「お前、府中の大地主夫妻が殺害された事件、覚えてるかい？」

「ええっと、府中の大地主夫妻...ああ、でもあれ、犯人、逮捕されたんだよね」

「そう、だから、今、僕の担当になってんだよ」

「それで、何か、問題があるの？」

「いや、被疑者は警察で犯行を認め、地検でも殺害は認めているんだよ。ところが、最近になって、雲行きが怪しいんだ。見つかった証拠と被疑者の自供したことが合わなくてな」

「自供と証拠が合わないって、どういうこと？」

「うーん、被疑者は、自供ではナイフで刺したと言ってたんだ。ところが、最近になってその凶器が発見されて、出てきたのは出刃庖丁だったんだよ」

「つまり、調書にある兇器と見つかった凶器が一致しないわけだね」

「ああ、そうだ」

「その見つかった出刃包丁は、間違いなく本物なの？」

「もちろん。見つかった出刃庖丁に付いていた血痕は、被害者の血液型とも一致したし、DNA鑑定でも一致している。それに、自供で兇器を捨てたという場所で、その出刃庖丁も見つかっているんだ」

「なるほど.....ってことは、自供に嘘がある可能性はないの？」

「可能性はあるよ。誰かをかばって身代りになったとか、あるいは罪を逃れるため、わざと違った兇器を言ったとか。だけど、ほんとのところは分かんないよ」

「じゃあ、ぜひとも、真実を確かめたいところだね」

「そうだ、起訴するなら、被疑者が、間違いなく犯人だという確信を持って、やりたいからね、僕としては」

「そうだろうね。それで、僕に手伝ってことか」

「そうだ。例の特殊なプロファイリング、『地縛記憶』の探索とかいうのをやってくれよ」

「オッケー！」

「じゃあ、頼んだ」

「それじゃあ、今度の週末に、事件現場を見せてくれ」

「ああ、案内するよ。で、今度も彼女と？」

「うん、そういう約束になってるから」

杏子は佑太のプロファイリングの助手をしてくれることになっていた。彼女の研究テーマが記憶で、『地縛記憶』に興味を引かれたのも助手を引き受けた理由の一つであった。

「よし、分かった」

慶太は言った。

週末の朝、前夜からの雪がまだ降り続いていた。慶太の運転する車は、府中市の事件現場へと向かっていた。車は四駆のオフロード車で、雪道でも安定した走りを見せた。行く手には、雪に霞む武蔵野の風景が広がっていた。「今日は、一緒に来ていただいて申し訳ありません。せっかくの週末でしたのに」

運転席の慶太が後部座席に座る杏子に言った。

「いいえ、私は、とても楽しいです。こんな綺麗な雪景色も見られて」

「そうですか。そう言っていただけると有り難いです」

「慶太さん、今度、ご結婚なさるそうですね、おめでとうございます」

「はい、そろそろ年貢の納め時ということで」

「おい、慶太、それは悠子さんに失礼じゃないか」

助手席から佑太が慶太の言葉尻をとらえて言った。

「何だ、僕はね、覚悟を決めて結婚する、と言う意味で使ったの。諦めて結婚するってことじゃないからな」

「ああ、そうだったの。でも、僕の言った意味、分かったところをみると、本音はどちらか分かんないな」

「失礼なことを言う奴だな。杏子さん、こんなふうに因縁を付けるところもありますので、気を付けてくださいね」

慶太は反撃に出た。三人が他愛もない話に興じているうちに、車の先に白く雪に覆われた森とその入口にある大きな二本の門柱が見えてきた。

三人を乗せた車が門柱の間を抜けると、大きな木造の邸宅が現れた。玄関の手前にはフード付きの合羽を着た警備の警官が二人立っていた。車は警官の前で停まった。

「おはようございます。朝早いうちから、ご苦労様です。家の鍵は開けておりますので」
三人が車から降りると警官の一人が言った。警官は慶太と佑太が双子であることに気づいたのか、二人の顔を見比べていた。

「おはようございます。こちらこそ、お世話になります。じゃあ、入りますので」
慶太は、警官に会釈すると、脇を抜けて先に立って歩いた。佑太は杏子と慶太のあとを追った。アプローチの踏み石には雪が積もっていたが、警官の足跡がくっきりと残っていた。

コートに付いた雪を落とすと、三人は玄関に入った。天気のためか、玄関ホールは薄暗かった。たたきには黒い天然石が敷き詰められている。上がりかまちの先から重厚な天然木の板張りの廊下が伸びていて、その左端にゆるやかな傾斜の階段が設けられていた。階段の上り口と廊下の奥に死体の輪郭線が描かれている。右壁にはドアがひとつ、そして廊下の突き当たりにはステンドグラスが組み込まれたもうひとつのドアがあった。視線を上に向けると、天井からは豪華なシャンデリアが下がっていた。

三人は、用意してきた靴カバーを履き、手にビニールの手袋を着けるとホールに上がった。壁のスイッチを押すとホールに灯りが点き、壁も床も明るく照らし出された。右手のドアから入ると、そこは応接室だった。

「ここが事件の始まりの現場だ。被害者のひとりである館の主人に通された被疑者が、この応接間で借金返済の猶予を頼んだ。しかし、断られ、逆上した被疑者は、持っていた凶器の刃物で背中をひと刺しした。さらに、逃げる被害者を追って廊下の奥でとどめを刺した。階下の騒ぎを聞きつけた婦人は、二階から階段をホールまで降りてきた。そこで被疑者は、婦人の胸と腹を十数か所刺して、致命傷を負わせている。そのあと被疑者は、奥のリビング、二階の寝室などすべての部屋を物色して回り、現金五百数十万と金の延べ板などを盗み出した。そして最後は、この玄関から出て行った。以上がこの殺害現場で被疑者のとった行動のあらままだよ、自供によるとね」

「犯行前日は雨が降っていたんだから、門から玄関までの地面は湿っていたはずだ。だとすると、地面に被疑者の足跡が着いていたはずだよ」

「それは、もちろん」

「被疑者の他に、不審な足跡は残ってなかった？」

「ええ、それが、あることはあったんだが、それは、下駄の足跡なんだ。だが、それは一方通行、つまり、入って来た足跡だけが残っていたんだ」

「一方通行の下駄の足跡？」

「ああ、あるのは、この家に入って来た際の下駄の足跡だけで、出ていった下駄の足跡は残っていないんだ。あとは、被害者二人の足跡が複数、それと、その日訪れた数人の足跡があったけど、それは、ちゃんと、往復しているんだよ。その数人の確認は終わってて、容疑なしとなっている」

「そうか、誰のものとも分からない、一方通行の下駄の足跡があるのか。不思議だね」

佑太は玄関ホールに戻ると、被害者である館の主人が刺されてたどった順路を目で追った。次に階段の上からホールに描かれた死体輪郭線にかけて、第二の被害者である婦人がたどった順路を観察した。それが終わると、佑太は、玄関ホールの上がり口に立ってホール全体を俯瞰するように眺めた。まもなく彼の視界は真白になり、次に映像が現れて来た。

目の前に、若い男が廊下の奥を向いて立っている。七十過ぎの老紳士がにこやかな表情で右手の応接室のドアを開けて、若い男に入るよう手招きをしている。

〈この人が、御主人か。で、この若い男は？〉

若い男が応接室へと入って行くと、佑太の視線は男のあとを追った。

「さあ、そこにお掛けなさい。今日は冷えてるからね、手袋もとれないんだね。今、女房にあったかい飲み物を用意させるからね」

老紳士は若い男に言った。老紳士と若い男は知り合いのようだ。

「いえ、すぐに帰りますから、お構いなく」

若い男はそう言って、皮張りの肘掛椅子に座った。

「タバコは、吸うのかい？」

老紳士は聞いた。

「ええ」

「じゃあ、ちょっと待ちなさい。いいのがあるから」

老紳士はそう言うと、腰を上げて背中を向けた。すると、突然、若い男は立ち上がり、老紳士の背中にぶつかったように見えた。老紳士は「うっ」と、声を出した。ぶつかってしばらくは二人の身体はくっついて離れなかったが、男が後ろに下がると、老紳士の背中は真っ赤に染まり、男の手袋をした両手には血の付いた包丁が握られていた。

〈この男が犯人だったのか！〉

男の顔は青ざめて、右の頬がぴくぴくとけいれんを繰り返し、血糊の付いた包丁を持つ手は小刻みに震えていた。男の身体が離れると、老紳士は前のめりになり、ふらつきながら歩き出した。そして、「誰か、誰か、助けてくれ」と声を出した。ドアにたどりつくと、ノブを握り、開けた。廊下に出ると、再び「誰か、助けて、誰か」としぼるように声を出し、奥の方へと歩いて行った。若い男は、しばらく放心したように立ちすくんでいたが、我に帰ると、開いたドアから廊下に走り出た。右を見た。男は老紳士の姿を見つけると、追いかけて身体ごとぶつかった。その瞬間、「ウーッ」と老紳士は呻き、前のめりに倒れていった。

その直後、二階で声がした。

「貴方、どうかされました？ 貴方、貴方...どうしたのかしらね？」

階段を降りる足音が聞こえてきた。

足音に気づいた若い男は後ろを振り向いた。真っ青で狂気の形相だ。胸は返り血を浴びて真っ赤に染まっている。男は急に階段の方へ走り出した。そして、下りて来たばかりの老夫人の胸を正面から突き刺した。

「ううっ、助けて、助けて...」

夫人は呻き声をあげ、仰向けに倒れたが、その声で男の顔はさらに引きつった。

「このやろう、このやろう」

男は馬乗りになり、狂ったように何度も夫人の胸と腹を突き刺していたが、夫人が動かなくなると、包丁を持ったまま立ち上がり、放心した様子で老夫人の姿を真上から見下ろしていた。が、突如、何か思いついたのか、階段を上って行った。そして、十分もしないうちに階下に降りて来ると、今度は奥のドアからリビングに入って行った。それから数分して部屋から大きな鞆を持って出て来ると、男は玄関のたたきにあった下駄を鞆に入れた。次に、たたきを見まわして一足の女物の靴に気付くと、それに無理やり足を入れた。

〈何やってんだ？〉

佑太の目の前で、若い男はゆっくりと後ろ向きに用心深く歩き始め玄関から外へ出た。そこで、映像は途絶えた。

「ふーっ」

佑太は大きく息を吐いた。手には汗が滲んでいたが、杏子はその手をしっかりと握っていた。

「大丈夫？ 佑太さん」

「ああ、大丈夫、大丈夫」

佑太は答えた。慶太は茫然と二人を見ていた。

「何があったんだ？ 佑太、お前、今、何を見てたんだ？」

「ああ、今から話すよ。犯人はね、若い男だ。多分、年齢は三十代。被害者は、にこやかな顔で犯人を応接室に迎え入れてたから、二人は当然、顔見知りだ。犯人は、応接室で、被害者が背中を向けたところで最初のひと刺しを入れた。凶器は出刃庖丁。そして、廊下を逃げる被害者を追いかけてとどめを刺した。次に、階段を降りて来た第二の被害者である夫人を十数回も執拗に刺していた。そのあと、家中を捜し回って、鞆に金品を入れ、自分の履いてきた下駄も鞆に入れ、この家の、多分、夫人の履物を履いて、後ろ向きに出て行った。だから、婦人靴が一足無くなっているはずだ。ところで、被疑者というのは六十代の男だったよね」

「そうだ、若い男じゃないよ。それに、被疑者の足跡は往復見つかっていて、もちろん下駄じゃないよ。で、下駄はどんな下駄だったの？」

「下駄には、『竹林』という銘が入ってたよ。あれって、どこかの旅館の下駄じゃないかな。確か、日野市あたりに竹林館とかいう旅館があったと思うから、そこかもしれないね。履物から足がつかないように前もって準備してたんじゃないかな。全く、計画的だね。でも、犯人の人相も分かったから、逮捕はすぐにできるんじゃないの」

「うーん、佑太、助かったよ。お前のお蔭で、冤罪をつくらずに、済みそうだ」
慶太の顔は興奮のためか、紅潮していた。

三人が玄関から出ると、雪は止み、雲の切れ目からの日差しが眩しかった。アプローチの雪は溶け始め、その上に残る足跡は黒味を帯びていた。

《杏子の願い》

それから二週間ほど経ったころ、佑太は杏子と共に医科研の宮田の部屋にいた。

「ふた仕事、終わりましたよ。さすがに、親友と兄貴の事件でしたから、肩の荷は重かったですね。それに『地縛記憶』を探索すると、結構、疲れるんです。でも、頭痛はしなかったです、二回とも。何でだろう？」

「それは、私が付いてたからでしょう」

「えっ、どうして、そういう解釈になるの？」

「だって、前の二回は頭痛がして、今度は二回とも、頭痛なしでしょう。そして、前の二回は佑太さんだけで、そして、今度の二回はどちらも私が傍にいた。そうでしょう」

「そう言えば、そうだね、確かに」

「だから、私が付いてれば、頭痛は起きないってことになるでしょう。私の言っていることは、論理的でしょう、佑太さん。宮田先生も、そうお思いになりますよね」

杏子は言った。

「確かに、安田君の言い分は、論理的であり、故に、真実である可能性が高いと言えるね」

宮田は、笑いながら言った。

「そうですよね。やっぱり、佑太さんには、私が、必要なんです！」

「それも、僕は同感だね。安藤と安田君は、やっぱり赤い糸で結ばれているんだよ。喜べ、安藤佑太」

「はあ」

佑太は気のない返事をしたが、杏子が言った通りかもしれないと思った。映像を見終わったあとの気分が、杏子がいるのと、いないとでは、全く違っていたのだ。それは、頭痛の有る無しだけではなかった。杏子が傍にいた今度の二回は映像が消えた時、凄惨な犯行現場の映像を見たあとにも関わらず、疲れは感じたものの、同時に、そう快感に包まれたのだ。

「で、事件はどうなったのかな？」

宮田は訊いた。

「真犯人は、被疑者の息子でした。被疑者は、確かに、被害者に多額の借金があって、あの日はその借金の返済期限を伸ばしてくれるように、あの館に頼みに行ったそうなんです。だから、足跡も残っていたんですね。で、その時、被害者は、借金の返済は、ある時払いで結構、うちは借金を取り立てなくても、特別困っているわけではないからと、温情溢れる返答だったそうです。ところが、元々被害者の資産に眼を付けていた被疑者の息子が、父親が訪問したあとに被害者宅を訪れて、犯行に及んだ、そういうことです。息子にもサラ金に数百万単位の借金があったそうですから、それが一番の動機かもしれませんね。それと、日頃から金持ち、資産家に対して反感を持っていたということです」

佑太は、慶太から訊いた事件の顛末を話した。

「とすると、息子をかばって、父親が身代りになろうとしたってことだね」

「そういうことです。被疑者は被害者に多額の借金をしていたので参考人として呼ばれています。その事情聴取の途中で、事件が息子の犯行と分かったんでしょう。事件のあと、息子が急に明るくなって、借金の取り立てもぱったりと止んだので、不思議に思ってたそうですから、すぐにピーンと来たんでしょう」

「悲しいことだけど、その話を聞くと、被害者がさらに気の毒になるね」

宮田は眉根を寄せた。

「そうですね。一番悪いのは、真犯人である息子ってことでしょうけど、その動機の大元が借金で、それにはサラ金で法外な利息を吹っかけられて膨らんでた分もあるとのことで、ある意味、犯人も、被害者の一面を持ってることになるわけです。真相を知れば知るほど、複雑な気持ちになりますね」

佑太の気分も少し重たくなった。その様子に気づいたのか、杏子が言った。

「お二人とも、もっと明るいことを考えましょうよ。人生は、前向きに、前向きに。そうでなくっちゃ、やってられませんよ。とにかく、事件は解決。慶太さんは冤罪づくりから逃れることができた。それには、佑太さんの超能力が、大貢献したんですから、ここで乾杯しましょう」

「乾杯って、ビールもシャンパンも、ここにはないよ！」

佑太は言った。

「あるじゃないですか。目の前に」

佑太は目の前のテーブルを見た。そこには冷めた紅茶の入ったカップが三つあるだけだった。

「えっ、これで、乾杯すんの？」

「もちろんです。飲み物なら、何でも乾杯はできるんです。人生、アルコールにばかり、頼ってはいけません。人生、真面目が肝腎ですよ、佑太さん。佑太さんのこと、慶太さんから、頼まれてますからね。佑太は酒癖が悪いから、飲ませるなって」

「ええーっ、慶太、そんな余計なこと頼んだの、あいつ...」

結局、三人は、冷めた紅茶で乾杯をすることになった。

「じゃあ、僭越ながら、わたくし安田杏子が乾杯の音頭をとらせていただきます。二つの事件解決と、佑太さんのスーパープロファイラーとしての成功を祝し、宮田先生のご指導に、心よりの感謝を込めて...あっ、それと、ええー、わたくし安田杏子のささやかな願いが叶いますことを、祈念しまして、乾杯することにします。では、カンパニー」

「カンパニー」

佑太は、冷めた紅茶を一気に飲み干した。

「ところで、安田君、さっき言った君のささやかな願って、何なの？」

宮田が聞いた。杏子は、すぐには返事をしなかったが、空になったカップをテーブルに置くと、ハンケチで口を拭い、一瞬、佑太に視線を送った。

「宮田先生、それは...しばらくは、ひ・み・つ」

宮田は杏子の願いが分かったのか、笑いながら佑太の顔を見ると、その顔は少しはにかんだように見えた。

部屋の窓の外では軒先から落ちる雪解けの水が打楽器となって音楽を奏でていた。春は、もう、すぐそこに来ていた。

第一章

《白い謎》

三月五日早朝、JR高松町駅の裏手で腹部と左頸部を刺された六十過ぎの男の死体が発見された。殺害現場には高松署からの機動捜査隊や鑑識が駆けつけ、辺りは物々しい雰囲気包まれていた。

第一発見者は、現場を通りかかった新聞配達人だった。死体発見時の状況を訊かれた配達人は答えた。

「朝六時過ぎでした。自転車でいつものように通りかかったんですが、あの建物の陰に人が倒れているのが見えて、近づいたら、男の人が仰向けに倒れ、腹の辺りが真白に染まっていたんで、何だろうと思って、よく見ると、内臓が飛び出し、首にも傷があり、息をしてる風でもなかったので、これは、殺されたんだと思って、それですぐに交番に駆け込んだんです」

新聞配達の男は中年の刑事に言った。傍では、二十代半ばの若い刑事がメモをとっていた。

「それで、被害者は、手に刃物を持っていたんですね」

刑事は訊いた。

「はい」

「辺りに、血の付いたものとか、何か落ちていなかったですか？」

「いえ、何も気づきませんでした。私も、早く交番に知らせなきゃと思って、探もしませんでしたけど...」

「で、貴方の他には、周りに誰もいなかったんですか？」

「はい、通りかかった時は、私の他には誰も」

配達人は答えた。

「分かりました。では、また、お話を伺うことがあるかもしれませんが、今日はこのくらいで。どうも、ご協力有難うございました」

刑事が礼を言うと、配達人は頭を下げ、その場を立ち去った。

「左の腹部を一突き、そして右に腹を横断したような傷、首にも刺し傷がありますね。これは、まるで、切腹じゃないですか。ということは、自殺でしょうか？ それと、腹に撒かれた白いペンキには、どんな意味が？ 何かの儀式なんじゃないでしょうか？ お清めとか...」

若い刑事は言った。

「お清め？ 白い塩でお清めってのは聞くけど、ペンキでお清めはないだろう、お前。傷は確かに、切腹みたいだな...自殺か、他殺か、どうも、分からんな。だが、傷が派手な割には現場の出血が少ない。どっかで殺されてから運ばれたのか？ だとすれば、他殺の線もあるぞ。そろそろ、本庁からも、出張ってくる頃だろう。さあ、これから忙しくなるぞ、唐沢」

「はいっ！」

若い刑事は元気のよい返事をした。

初動捜査では事件の手掛かりは全くつかめなかった。傷の大きさの割には発見現場に残る血の量が少ないことから、死体は別な場所で殺されてから運ばれたものと判断され、他殺の線が濃厚ということになった。

現場を管轄する高松署には特別捜査本部が開設され、署の講堂には『高松町不動産業者殺害事件特別捜査本部』と墨書された紙が貼りだされた。この事件の捜査には警視庁捜査一課殺人班の警部、坂田新太郎も参加していた。坂田は高松署の若い刑事を相棒として捜査に当たることになった。

「坂田警部、唐沢信吾巡査部長です。ご指導、宜しくお願いします」
唐沢は、二十代後半で、背が低く痩せた男だった。サルに似ているが、どこか愛嬌のある顔である。

「いやいや、ここいらは君の方が詳しいだろう。地取り捜査がおれたちの役目だから、君に期待するところ、大だよ」坂田は唐沢に言った。坂田は身長百八十センチ、体重八十キロの堂々たる体躯であり、柔道四段の猛者である。年齢は三十三歳だが、不敵な面構えと体型のため、年齢より老けて見えた。坂田の言う地取り捜査とは、事件現場周辺を回り、不審な者の目撃情報など、事件の手がかりとなる情報を聞きまわる作業である。

〈さあ、仕事だ。手掛かりがつかめるといいのだが...〉

坂田は、若い唐沢を連れて会議が終った講堂を出ると、高松町駅近くの事件現場に向かった。検視および遺体解剖の結果、被害者の死亡時刻は遺体の発見された三月五日の前日、つまり、三月四日の午後八時から十時の間と推定された。この時間帯に何か手掛かりになることが無いか二人は聞き込みを行うことになった。二人はJR高松町駅から海側に出てすぐの事件現場の周辺のビル、コンビニなどを一軒一軒回り、聞き込みを続けて行った。しかし、被害者の目撃情報も犯人の可能性のある不審者の情報も何一つ得られなかった。 つづく

以後の展開、乞うご期待

地縛記憶 1（序章）

<http://p.booklog.jp/book/60108>

著者：白鳥恭介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamikumah/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/60108>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/60108>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ